

# 令和3年度(2021年度) 第2回北海道農業・農村振興審議会 議事概要

1 日時 令和4年(2022年)2月16日(水)13:10~16:00

2 場所 ニューオータニイン札幌 2階 鶴の間

3 内容

## (1) 報告事項

①本道における地域おこし協力隊の状況

・資料1により説明

②畜舎等の建築及び利用の特例に関する法律施行条例について

・資料2により説明

## (2) 意見聴取

北海道農業・農村整備推進方針の改定について

・資料3-1~5により説明

## (3) 意見交換

### 【話題提供】

第6期北海道農業・農村振興推進計画の推進について

○地域農業・農村の「めざす姿」の実現に向けた取組の実施状況

・資料4により説明

○各市町村の担い手育成・確保対策について

・資料5により説明

○スマート農業に係る普及活動事例について報告事項

・資料6により説明

### 【委員からの主な意見等】

・名寄市でも新規参入を受入しているが、私たち農家自体の環境はもちろんだが、新規参入される方の衣食住の環境、また、私たち受け入れる農家側のトイレの問題など、住居環境が整っていないために、長期間の受入に一步進まない部分もあった。お互いの思いはあるが、名寄市は新規参入の受入が他の町村から見ると少ないかなと感じている。そういう環境整備をしながら受入をしていきたいと話を聞いて思った。

・芽室町で新規参入されている方は、比較的農地も少なく有機栽培とか無農薬をやりながら自分で直売所を持っていたり、JAの直売所に出荷したりしている人を2人ほど把握している。新規参入も大事だが、それによって農家戸数がもしも減っていないのであれば。私の町も減っては来ていますが、農家子弟が農家を継がないという子供達が増えているのであれ

ば、それに対してどう考えているのか。前回の南委員の発言で、息子の妻の給料も払えないという話、家族の問題もあると思うが、親の教育という言い方はちょっと失礼かもしれないが。私も今自分の子供が帰ってきて、子供達の給料だとかを考えるようになっていて、その事もどこかに盛り込んで頂ければと思う。

・農村ツーリズムについて、受け入れている者として意見を述べたい。消費者の理解促進は理解できるが、受け入れる者としてこの2年、コロナ過において修学旅行生は激減し受入の件数は減っている。同時に受入農家はかなりの件数で減っている。空知においては、市町村で受け入れできないところは他の市町村で負担するということが実際に起きている。農家で受け入れする方の高齢化も原因だが、若い世代が受入を敬遠している。一方、観光農園については、反対に増えている。旅行代理店などの受入体験は、賃金が良いせい結構受入件数は多いが、修学旅行生の小、中、高校生の受入については厳しい状況。もう少し消費者の理解だけでなく、農家の理解を深めて活動を続けていかないと、教育の農業体験はもっと数が減っていくと、受入側としては危機を感じている。

・スマート農業のことだが、我が家でも直進アシストの田植機を去年の春入れて、とても調子がいい。一人でも植え付けが出来るということで、人手が全くいらなくなった。それだけでも、素晴らしい機械と思っている。もう一つ密苗のことについて、もう少し経費と費用効果のことも事例的に出てくれば、本格的にスマートになると思う。水田であれば春作業の労力軽減、軽油の軽減になるといった事例があってもいい。

・地域農業・農村のめざす姿の取組事例に大変興味を持った。私の店ではコロナ前には色々な生産者に来て頂き、お客様に郷土料理教室を実施。例えば、浜田町長の新得町の地鶏を使って料理教室をやって生産者が地鶏の良さを説明して、消費者が食べるという機会を持っていた。直接、消費者と交流することで、お客様は色々な産地や農業者に興味を持たれたという思いがある。また、コロナが明けたら、それらの取組をすることによって、消費者も道内の農業について興味を持つのではないかと思った。

・当社に6次化を考えている生産者がよく来る。何を作ったらよいか、何かやりたいが、何がいいのかわからない。やはり食のトレンドとか、農家であれば大豆を扱ったり、小麦粉を使ったり、大豆を使ったプロテインフードのマイスターがそういうのが流行っているよとか、そういう話ができる場所があったり何か支援できる機会があったらと思う。

・新規就農について村では少子高齢化に伴い、農業経営者が少しずつ減っている。新規就農者を確保して、子供達には早い段階でJA青年部さんが農家は楽しいよ、安全安心な食べ物をこうやって作っているから、みんなも頑張れば大きくなったら農家をしたらいいよとか、早い支援が大事と思う。先ほどの資料を見て、早くから支援しているところは段々増えてきているので、今すぐにでも実行に移したらいいと思った。

・畑地かんがい整備、中札内は早くから整備されていて、去年は結構暑かったので、スプリンクラーが稼働して良かったが、老朽化してきているので、新しいところばかりでなく、古いところも少しずつ補助を出して直していった方がいいと思う。

・スマート農業は大歓迎。ただ、それに伴って畑を大きくするために、防風林を伐採したとき、自然災害で風の通り道にあるところはどうか整備すべきか。隣の畑が減農薬とか無農薬の

場合に農薬をかける畑があると、その間を仕切るものが段々なくなり、隣同士が揉めることになるという危惧。そうした配慮も大事と思う。ドローンで農薬をかけているところもあるが、ドローンは小さくトラクタを使うよりは少ないので、沢山の量をまくには技術の開発が大事と思う。

・今年度、コープさっぽろ農業賞を4年振りに開催した。さすがに4年も経つと新規の就農者や受賞者と交流する機会がなかなか無く、審査も全てがオンラインという状況。直接の交流が出来なくなり、今はオンラインによる交流になっているが、組合員もだいたいオンラインに慣れてきたので、スムーズに出来ている。コロナだけではなく、これから色々なところで生産者の話をオンラインで出来るかなと、そういう交流の仕方があってもよいと思う。

・昨年末、道南の農林水産セミナーに参加する機会があり、最近の温暖化の影響がどれ位お米にあるのかというアンケートがとても細かく面白かった。農業と水産・林業の全部を地域課題として地元の方と一緒に考えたり、消費者の方に提供したり、すごい相乗効果というか面白いものが出来そうな気がしている。道としては難しいと思うが、振興局の話が面白く、感想ですがお伝えした。

・従前の建築基準法の技術基準を緩和した畜舎特例法に基づいて建築ができることは、経済界として歓迎。酪農であればオセアニアなどと比べても日本の生乳の生産費は高く、生産費の低減につながる。手続きも、オンライン申請が可能である点は評価。今後は特例法の周知をお願い。

・農家人口が大きく減少する中、ほ場の大区画化などスマート農業機械の効率的な作業に適した農地整備を推進してほしい。近年激甚化する災害は、北海道経済全体へも多大な影響を発生。被害を未然に防ぐ排水機能の強化や老朽化した農業水利施設の長寿命化等、災害に強い農村づくりに向けた基盤整備を着実に推進してほしい。脱炭素社会の実現に向け、温室効果ガスの削減や環境負荷軽減に資する農地の排水性改善などの整備事業を推進してほしい。当会としても、北海道農業の持続的発展のため、スマート農業技術の現場への普及やゼロカーボン北海道の実現に向け、継続して支援していきたい。

・コロナによる国産作物の在庫過多解消に向けた取組強化ということで、コロナの影響により国産作物及びその加工物の消費低迷が発生。国・道では各種対策を検討・実施しているが、根本的な改善には至っていない。併せて、原材料・資材、エネルギー、物流などのコスト上昇により、持続的な食の安定供給が脅かされていることから産業を支えるための過剰在庫に関する費用負担、その在庫消化に対する補助の継続・拡大、国産食品の消費拡大活動など各種施策の実施をお願い。

・北海道内、103JA、全てのJAをコロナ化の中、2年間かけて全て訪問した。ペーパー上でもイメージとして感じていたが、やはり実際見た中では、北海道内各地で非常に特色ある農業を行っている。今日も取組事例として、各地域ではリーダーシップを発揮した中で北海道農業として全体の農業を担っていると痛感しているところ。

・私は、昨年、審議会、地域のリーダーを担って頂く方をより多く育てていかなければいけないと意見を述べたと思う。今日も委員から、担い手を含めた形で意見があったと思うが、未来に向けたスマート農業に関しても、やはり最終的には人が動かしていくことなので

人材育成をしっかりと取り組んで頂ければと思う。

・3白について、非常にコロナ過で影響のある中で、多くの消費者に理解を頂き、昨年末から今現在、牛乳の話ですが、まだ予断はできないが、処理不能は回避できているという状況。今後においては、普段の牛乳の生産や砂糖、米もそうだが、私たちの農業は消費者の皆さまにしっかり理解して頂くことで成り立っており、今コロナ過によって、海外からの物流が滞っている物もある中、北海道としては食料自給率に対してさらに責任が増すと思う。新規就農についての意見があったが、逆に消費者が新規就農するという事で、まずは、消費者に農業を理解して頂けなければ、今日の問題もさらに進めないと思う。

・光ファイバーの整備が、今回のコロナ過においてリモート会議が増えるという中で整備されると聞いているが、不利地も含め色々な場所もあるので通信網のさらなる整備を進めることで、新たな担い手、新規就農の可能性が増える。整備は農政部ではないと思うが、他部と協力しながら今後進めて頂ければと思う。

・団体の立場というよりも一農家の生産者として述べる。コロナで非常に農産物が余っている状況は、非常に農家として不安。また、機械の電子部品や肥料、燃料の高騰などで、肥料も中国産が入ってこないとのこと。中央会、ホクレン等に是非頑張ってもらい、助成なども十分にしていきたい。

・GPSに関して、防風林は、若い頃は大型機械を乗って旋回するのにも邪魔で、必要性をあまり感じてなかった。しかし、30年近く農家をやっていると風の被害で防風林が必ず必要な物だと認識したし、それを他の農家の方にもわかっていきたい。提案だが、30mの幅の防風林があったら真ん中10mは高くてもいいが、あとの20mは段々低くしてはどうか。防風林により日陰になり作物がとれないとか、枝が畑に入るといことが、農家にとって大きな問題。帯広市の防風林もだが、境界から5m離れているから対応できないと言われる。その枝が伸びてきたらようやく動いてくれるという状況。やはり日陰というのは作物にかなりの影響を与えるので、作物に近いところには背の低い木を植えて、工夫をしていきたいと前から思っている。30m幅なら30mの幅で同じ品種の同じ背の高さの木でなく、少し変えていきたいと思っている。

・スマート農業で普及センターが窓口になっているとのことだが、PR不足。初めて普及センターがやっていることを聞いた。普及センターは人数も減っているし、農家との密なことも昔から見たら全然無くなった。こういうPRもどんどんしていきたいと思う。

・整備事業だが、暗渠も必要できちんとやってほしいし、年数が経つと老朽化するので、やり直しの予算付けをお願い。客土することによって品質も良くなるが土取場がないとか、距離があるからお金がかかるとか、振興局に言われるが、よりいい物を取るには土質の改善が必要なのでお願い。

・10年ぶりに改訂された農業農村整備推進方針は、土地連としても今後の農業農村整備事業を推進する上での指針。情勢変化あるいは課題等を踏まえてまとめて頂き感謝。農業農村整備事業の展開方向と道の取組を整理され、事業の効果や具体的な取組事例が、青枠のコラムでわかりやすく整理され、目を引く部分でもある。折角なので、農業農村整備を実施した農業者の声をこの中に入れてはどうかと感じたところ。これまでも事業の波及効果は、各地

域の取組を各種資料で紹介されているが、地域農業を背負っている担い手の声や6次産業化に取り組む農業者や地域にとって、基盤整備がどのような下支えになっているのかを担い手の声などとともこのコラムで紹介してはどうか。

・道の取組の地域の課題解決に向けた支援について、黄色の囲みの中に主な取組として、将来構想を話し合うための情報提供、あるいは地域課題の解決のために必要な具体策の提案等、整理されている。これからの農業農村整備を推進する上で、大切な取組だが、昨年、水田活用直接支払交付金の見直しが国から示され、北海道の水田農業にとって大きな課題、影響が懸念されている。地域によっては、米と転作のブロックローテーションを確立していく、あるいは水田の畑地化を進めるなど、地域で今後の対応を検討されているところだと思う。予定している水田の汎用化や用水路、排水機場の施設の整備などの基盤整備の構想が変わっていくことが想定される。限られた農業農村整備予算の中で、それぞれの地域で今後の水田農業の在り方に対応するために必要な基盤整備の優先順位も変わってくると考えられるところ。新たな水田農業ビジョンに即した、きめ細やかな支援、これが今後大きな課題であり、国と十分な連携の中で、進めていくことが必要。重点的な対応としてお願い。

・今回スマート農業に係る普及ということで、14事例を整理され、改めてこういう効果があると再認識したところ。今後、特に北海道においては、このスマート農業が加速的に進んでいくと感じる。一方で、北海道の農業、水田、畑作、酪農、施設園芸それぞれの経営規模による費用対効果がある。スマート農業が導入することによって効果が出る、出ないの境目があると思う。今後はコストが縮減されて一層普及されることを期待したい。

・資料4だが素晴らしい事例がまとめられていて、次のステップとして、この地域内で上げられている様な取組を真似して、まだ取組が進んでいない団体とかに普及していくのが、次のステップになると思うが、それはかなり難しいと思う。多分、やる気のある組織は目標を伝えれば達成するところまでできるが、温度差が大きい地域、組織にどう普及していくというのは、多分コーディネーターなりワークショップを活用したりなど、地域に入っていく取組が必要だと思う。その辺り次のステップでどういう工夫が考えられているのかお聞きしたい。

・農業農村整備事業というと、かなりハードの対策というイメージが大きいですが、ソフト面の対策というのも同じくらい大事と考えている。交付金など制度的なものの大事だと思うが、農業農村整備事業と併用して、どうやって地域を活性化するのかという話だったり、どうやっていくのかというワークショップだったり、そういう対策が必要と思うが、農業農村整備事業と併せた取組、今後どのように工夫していくのか聞かせてほしい。

・新得町も次の人をどう作っていくか色々な取組をやっている。歴史的に古いのがレディースファームスクール。女性の担い手を作るため平成8年からスタートし、これまでに240人位卒業している。その中で地元農業者の配偶者になる人たちが53人。隣町の清水やもしかしたら根室などにも行っている方もいるかもしれない。女性の存在は本当に極めて高いと実感。余談だが、農家のおじさんは普段だらしない。彼女たちがその家に実習に入ることによって身なりが綺麗になり、身なりが綺麗になると家の中も綺麗になる。その上に労働時間の短縮をお互い頑張っている。空いた時間を一緒になって遊ぶ。生産性も上がるし、時間の使

い方も良くなるし、環境も良くなる。それなりにいい制度だと先輩方に感謝。それともう一つアユミルクは畜産関係の搾乳をメインにして次の世代を育てようということで、平成28年からスタート。現在ここの卒業生2人が新規就農ということで地元で就農。新規就農対策は色々な意味で時間のかかる問題。

・資料はわかりやすく、行政という立場だけでなく、きっと他の方が見てもよいのではないかと思った。我々、行政の役割とは現場で一緒になって町民と生活しているが、やる気のある人をどう見つけ、育て、そして一番が実践を一緒にできる人をどう作っていくのかと思っている。そのときには当然我々も一緒になって悩むが、困りごとは必ず付いてくるので、その困りごとの時に、北海道は相談できる相手という意味で頼りにしている。計画書はもちろん、現場での応援体制というのも改めてお願いしたい。

・先ほどレディースファームスクールの話で言い忘れたが、人を育てることは、担い手だが、もう一つの大きな役割、農業に対する応援団を作っていくのがスクールの目的の一つと思っている。これからも現場として努力をしていくので、是非一緒になって悩んで頂ける北海道農政部ということ、改めてお願いしたい。

・資料4の農業体験、うちの大学とやって頂きお礼。農業体験を受けた学生達もそうだが、本学は非常に農家指導や、農業をやってみたい子が多い。本学だけでなく東京農大もきっと一緒だと思うが、その動機付けになっているのが、グリーンツーリズムだったり、うちの大学でいうとミルク大学だったり小さいときの体験。まさに先に桑名局長が話した様な流れができています。それがうまく連動していないと感じているから、連動させる仕組みというのが必要なと、それはどこの教育機関でも一緒に連携しあっていく必要があると思った。

・私も現場を歩くので、スマート農業について農家さん達から非常に省力化になったとの声を聞く。それと極単純なミスが起きている。例えばサーモという温度センサーを入れて温度を制御するという単純な仕組みもあるが、それを入れてなくて地面の温度が35度位になって苗が枯れるという事例が結構あった。スマート農業は現場に入ってまだ、実証段階だから様々なそういったケアレスミスみたいなものが多いと思う。成功例も重要だと思うが、みなさんで共有することで失敗無く取り組みやすくなるので、情報の共有化についてもお願い。

・担い手問題に関して資料を整理し全体的な検証をした中で、新規就農者がコンスタントに増えている研修センターで色々な取組効果が出ていると思う。その中でも皆さんの意見の中で気づくことがあった。女性がある程度意欲を持って研修施設に来ると男性もそこに集まりやすく活気が出てくるのかなと思った。実は農協などの就農のセンターに来る女性の数というのが無視できないほど多いのを知ったが、実際に就農していくのは、ごくわずか。女性の声をどう吸い上げていくというのが課題と思う。

・農家子弟の就農だが、私も新規就農者を確保するよりも農家子弟が農家を継いでくれた方が楽じゃないかと思っていたが、事態は相当変わってきているとの感想。農業法人に就職したり、新規就農など、農業をやりたいというのが選択肢の一つでライフスタイルのような形になっている。例えば北海道大学の大学院を出ても酪農に新規参入するなど、こういったタイプの学生が何人か出ている。職業選択の一つとして農業が射程に入ってきており、そういう者に対してどう支援していくのが重要になっていると思う。また、本来の担い手だけで

なく、多様な人材や関係人口と位置けられるような人々が農村に来たときに、暖かく快適に迎える環境がないと中々農村の魅力を伝えることができないのではないかと。

- ・また、前回、農家に嫁いできた妻がただ働いてばかりで、労働に対する報酬がないという意見がでていたが、近代的な家族農業の在り方をもう少しPRしてもいいのかなと感想を持った。

- ・スマート農業については、いろいろと全貌が明らかになっていない部分もありスマート農業の中身を吟味する必要があるのではないかと。単純に労働と代替するだけではなく文字通りスマートな人間の意思決定をサポートするなど、経営者の頭脳が変わる、あるいは営農管理をサポートするような技術が出てくる。人工知能などのように経営者の頭脳と代替する部分と単純労働・農作業と代替する部分の区別というか、切り分けが必要なのかもしれない。トラクタの能力が人間に変わるということは、今までの機械化と真っ直ぐに走行できる自動操舵は先進的ではあるが、単なる労働節約だけだと、今までの機械化の延長となる。文字通りスマート技術を使いこなしていく必要があるのではないかと。技術を導入することによってどういうメリットやデメリットがあるのかを、短期・長期の視点でもう少しははっきりさせていくことが必要。前から出ている費用便益比、損益分岐点、規模の経済性を算定しておくことは必須。機械は相当高価なのでどれ位経済的メリットがあるのか、もう少しわかりやすい形で経済的にモデルケースでもよいかからきちんとスマート農業の経済性をはっきり示すことが普及にとって必要ではないかと。

- ・今回の3白の問題でもあるように農業生産には必ず不安定性がつきまとう。どんなに技術が進歩しても、結局、農業生産は自然条件、農産物需要の変化など経済条件によって左右され不安定性がつきもの。これにどう対処していくのか、常に考えておかなければならない。教訓でもある。ストレスチェックというか、スマート農業でこれだけ儲かればいいだけではなく、もし、米価が下がる、生産調整が増える、牛を淘汰しなければならないという場合、自身の経営はどうなるか、きちんとこうした不安定性に対して対処しておくことが必要。そういう意味ではサステナブルであるためにはリスクに対して強靱でなければならない。ついでにいえば、その時だけではなく、持続的な農業基盤も維持する必要がある。一時的に儲からないといって農業をやめてしまえば、国民経済的に見れば、折角投資して耕作しながら維持してきた水利施設、農地資本ストック、水田という装置、物的資本が全て無駄になってしまう。需要の変化は短期に生じるが生産そのものの調整は短期では不可能だ。持続性というのが重要で、リスクや不安定性に対処していくといった視点も必要ではないかと。スマート農業のように投資額が大きくなればなるほどこういった視点が必要ではないかと。

### (3) その他

- ・特になし

以上